

特253

72

武相郷土史上の女性

武相史研究の回顧
史蹟名勝めぐり一覽
附刊行圖書目錄

武相考古會

始



特 253
72

武相郷土史上の女性

弟 橋 媛	1	北條時宗の室	6
椋 崎 部 弟 女	2	阿 佛 尼	7
相 模 (乙 侍 従)	2	南 の 方	7
菅 原 孝 標 の 女	3	照 手 姫	8
坂 田 公 時 の 母	3	英 勝 院 阿 萬 の 方	8
尼 將 軍 政 子	4	松 田 た つ	9
土 肥 實 平 の 妻	4	二 宮 尊 德 の 女 文 子	9
眞 田 義 忠 の 乳 母	4	喜 遊	9
靜 御 前	5	平 沼 千 代 子	10
虎 御 前	5	光 榮 の 女 性 褒 章 拜 受 と 被 表 彰	11
松 下 禪 尼	6		

武相研究に就いて

武相考古會の目標と其の事業

日本精神。我が國民生活の基調たる傳統精神、唯一にして絶對たる日本精神こそ、現下の重大時局を打開し、如何なる國難をも突破する烈々たる偉力である。我が九千萬國民は其の職業の何たるを問はず咸、五體に横溢せるこの精神力により、可能を盡して君國に奉仕してゐるのである。學國上下・老若・男女は協力一致、永遠より永遠に亘つて、強烈なる日本精神の旗幟の下に、剛健なる歩武を以て邁進してゐる。

國史を省察し、郷土史を究明して、國土愛・郷土愛の念慮を愈々普遍、徹底せしめ、日本精神を基調とする久遠の太極進をして、絶えず歩調を整正せしめ、恒に活力あらしめんとするは、身を學に委ね、教育に奉ずるもの、天職である。土中に埋もるゝ古器物の片影、管底に蝕まるゝ古文書の斷翰零墨、これ等を學的に凝視して國史・郷土史の研鑽に資する靜(青色)的活動、かくして究明せる所を以て、或は學徒に報じ、或は大衆に呼びかけて、國土愛・郷土愛精神の振起策勵に資する動(丹色)的活動。この青・丹の混和せる紫色の活動こそ、武相考古會の標識である。

「關八州の力は日本全國に當り、武藏・相模の力は關八州全部に當る」とは、楠木正成が 後醍醐天皇に奏上した言葉であるが、如何にもよく鎌倉時代に於ける武・相兩國の勢力を言ひ表はして居る。由來武・相兩國は國史上重要な地位を占めてゐる。是を以て武相三千年の歴史を明かにして、郷土愛・國土愛の念慮を深め、日本精神を強調して、時弊匡救の上に格段の努力をなさんとするは本會の任務である。

本會は如上の標識の下に、其の任務を達成せんがため、大正十一年十一月其の創立以來研究會・踏査會・展覽會・講演會講習會等の開催、會誌の刊行・圖書の出版等の事業を續行しつゝあるのである。而して其の最も力を注ぐは武藏及び相模に



於ける、文化研究資料の保存である。即ち文書・記録・繪圖の蒐集・謄寫。考古學的遺蹟・遺物の調査並に傳説・古祭事其の他民間傳承の調査と記録の作製。それ等の文献の記録は武相叢書の名稱の下に史料篇(第一期十卷)考古篇(第一期十卷)となし續刊して永く保存を圖り、また考古學上の遺蹟・史蹟は其の一木一石に古代の文化を察すべく、その遺物は一點一片皆先人の遺作で、民族精神の流露せるを窺ふことを得るが、其の多くは數に於て稀なるのみならず、遺物の如きは土製品・木造物はもとより、今後の永き存在を懸念すべきものも極めて多いので、それ等を精密に寫生し、又は撮影して圖録を作成し形象の記録として保存に便し、また武相古來の民謡はこれを曲譜に寫し、音調の記録として後昆に傳へ、三者相俟つて武相文化史を大成せしめんとするものである。

更に本會は遺蹟・史蹟そのもの、保存に關して斡旋盡力すると共に、前記各種の資料を出來得るだけ蒐集し、一は以てそれ等の散逸・湮滅を防いで學徒の研究に便し、一は以て一般大衆をして温古知新の料たらしめ、愛郷心を強調、鼓舞し、進んで國土愛精神の發揚に資するため神奈川縣郷土館の建設を冀望し、これが實現に對し、其の一端になりとも微力を捧げたい。

武相郷土史上の女性

石野

瑛

人類文化の建設に於ける功績と、其の向上進展に對する責務の一半は言ふ迄もなく女性が享有し、又保有すべきである。男女兩性は互に其の特長とする所を發揮し、相倚り相助けて人間生活の全貌を完成せしめねばならない。これを過去の史實に徴するも、また眼前の事象に見るも、最も明かに展開せる事實である。しかし天地陰陽あり、ものに表裏あるが如く、女性には地であり、陰であり、裏にあたるが故に、多くの場合表面的なる男性によつて代表せらる。殊に我が國古來の慣習と、日本婦人の淑慎の美德から、其の顯れざるものが多い。こゝに於てか其の一半たる女性の業績に關する省察を必要とする。私は曩に幾種かの神奈川縣郷土史を書いたが、特に女性を對象とした記述の必要を感じ、こゝに本縣郷土史上に於ける數多き輝ける女性のうち、思ひ浮んだ人々の事績を概記して女子教育にたづさはるゝ方々並に幾多姉妹の參考に供する。

弟 橘 媛

日本武尊の妃、穗積氏忍山宿禰の女である。尊の東征に従ひ具さに辛苦を共にしたまふ。『古事記』『日本書紀』に現はれたる我が武相の歴史の劈頭は、日本武尊と弟橘媛の御事蹟に依つて燦然たる光輝を發す。即ち『古事記』に見ゆる日本武尊が相模の小野に燃ゆる火中に立ちて賊を討ち給ふた御武勇と、記、紀の兩書に掲ぐる弟橘媛が三浦の走水海に於て、海神の暴威を鎮める爲に、逆巻く怒濤に尊い御身を投ぜられた貞烈なる御行動とは、永く國民男女に至大なる教訓を垂れさせ給ふたもので、弟橘媛の御歌

佐泥佐斯佐加牟能哀怒通毛山流肥能
は人々の腦裡に深く刻まるゝものである。

本那迦迦多知豆斗比斯岐美波毛

椋 椅 部 弟 女

『萬葉集』には幾多女性の純真可憐なる心情を詠んだ歌が載せてある。今その一人を掲げる。天平勝寶七歲二月二十日に武藏國部領防人使椋正六位上安曇三國が進つた歌十二首の内に、橋樹郡上丁物部眞根及び其の妻椋椅部弟女が詠じた歌がある。即ち物部眞根が

伊波呂爾波 安之布多氣騰母 須美與氣乎 都久志爾伊多里氏 古布志氣毛波毛

我が家はいぶせきながら住みよいが、筑紫に行けば、戀しく思ふであらうと詠めば、妻の椋椅部弟女が

久佐麻久良 多妲乃麻流爾乃 比毛多要婆 安我豆等都氣呂 許禮乃波流母志

と、旅ゆく夫に何くれと旅装を整へしめ、其の中に針まで添へて綻びや破れが出来たら、自分の手で、この針を持つて繕ひなさいと歌つたもので、情緒の纏綿たるを覺ゆるのである。

相 模 (乙侍従)

歌人として知らる。初めの名を乙侍従といふ。父は詳でないが、源頼光の女ともいふ。母は前能登守慶滋保章の女である。相模入道一品宮祐子内親王の侍女である。相模守大江公資に嫁したので相模と名づく。公資の相模の任地より歸京するに及んで離別した。其の私行上には當時の世相にもよるとはいへ如何かと思ふ節もあるが、其の和歌に堪能であつたことは百人一首にも列してゐることで知ることを得る。相模に在るの時、目を患ふて日向藥師(中郡高部屋村日向寶城坊)に詣で、結願の日、寺の柱に記した

さして來し 日向の山を頼む身は 目もあきらかに 見えざらめやは
といふ歌は『相模家集』に見えてゐる。

菅 原 孝 標 の 女

菅原孝標の女は下總から武藏の竹芝を經、ふとひ川を渡つて相模に入り、京に上る道中を書いた『史科日記』の著者である。紀行文の白眉のもので、平安時代に於ける優れた女流文學者として數へねばならぬ。武相を通つた條には

にしとみといふ所の山、繪よく書きたらむ屏風を立て並べたらんやうなり。片つ方は海濱の緑も寄返る浪の景色も、いみじくおもし。もろこしが原といふ所も砂子のいみじう白きを二三日行く。夏は倭羅麥の濃く薄く、錦をひけるやうになむ咲きたる。これは秋の末なれば見えぬといふに、なほ所々はうちこぼれつゝ、あはれげに咲きわたれり。もろこしが原に倭羅麥の咲きけむこそなど、人々をかしがる。足柄山といふは四五日かねて恐しげに、暗りわたり、やうやう入りたつ麓のほどだに空の氣色はかばかしくも見えず、えもいはず茂りて、いと恐しげなり。……

とあつて、十三四歳の少女とは思はれぬ筆致である。西富は藤澤の西富なるべく、もろこしが原は平塚・大磯の海邊である。

坂 田 公 時 の 母

公時は相模國足柄山中に生れた人で、坂田主馬佐と稱し、父は坂田藏人といふ人であると言はれてゐる。お伽嚙には金時といひ、熊と相撲をとつた強い子供の代表となつて誰知らぬものはない。公時は長じて源頼光に仕へ渡邊綱・碓氷貞光・卜部季武と共に四天王として其の名高く、大江山の酒頭童子を滅ぼし、伊吹山の賊を平げるなど、其の功績が極めて多かつたと傳へられてゐる。

母は山姥として知られてゐるが、京師あたりの身分がある人の女であらうと想像される。金時が育くまれた足柄の大自然を母性化する説があるほど、偉大なる母性を具有した人であつたと思はれる。

尼將軍政子

源頼朝の室である。北條時政の長女。早く母を失ひ後母に養はる。頼朝の器局、非凡なるを洞察して之に契る。年二十。夫君頼朝の在世中には克く之を助けて幕府の創立に力を添へ、其の薨去後には専ら繁多なる政務に當つた。建保六年政子熊野に詣で、京師に至つて従三位に叙せられた。後鳥羽上皇召して之を見んとせられたが、邊鄙の老尼禮に習はざる故を以て辭して歸録、數月にして従二位に進む。實朝の弑せらるゝに及び、帝胤を請ひて將軍となさんとしたが許されず、藤原頼經を迎へて之を立つ。年甫めて二歳、政子専ら政事を決した。嘉祿元年七月十一日六十九歳を以て薨じた。政子嚴毅果斷、丈夫の風があり、夫君の武士道大成に對し、大に婦道を正して婦徳の重んずべきことを世に知らしめた。

土肥實平の室

土肥實平は宗平の子、相模國土肥庄に住した。治承四年八月二十三日源頼朝の石橋山舉兵に參じて、一族よく頼朝を守衛し、主將等數人を箱根外輪山東南山麓、己が居館の後山なる鐵曲起伏、鬱蒼たる林叢中、所謂鶴の岩屋の谷に隠潜せしめ、頼朝をして九死一生の危機を脱せしめ、霸業を遂ぐる一大開運の機を得しめた。實平の妻、賢にして敏、琴實に飯を盛り蔽ふに櫛を以てし、僧を一人伴ひて佛に手向くる花摘む様にて、峻嶺深谿を踏み、主將並に夫君等をして飢渴なからしめ、よく隠潜地内外の連絡を通じた。かくして頼朝は同月二十八日眞鶴岩浦(今、岩村)より安房に舟行することを得たのであつた。(考古集録第四參照)其の生む所の遠平また父母と共に源氏の爲に盡す所が多かつた。

眞田義忠の乳母

眞田義忠は三浦義明の末弟岡崎義實の子である。幼名を荒千代と稱した。其の乳母を吾嬭あづまといふ。曾て若殿荒千代が不例

の時、吾嬭は心を罩めて其の平穩を念じ、毎夜深更大山不動尊に祈願を凝らした。一夜城への歸るさ、惡漢に襲はれ路傍の蘆の間に身を潜めた。颯と吹き立つ風に茂り合つた蘆の葉は片靡きして吾嬭の身を蔽ひ隠し、彼の女は危くも難を免れた。今も此の地に生ふる蘆の葉は皆一方へ偏り出で、名づけて片葉の蘆といふ。義忠は長じて治承四年八月二十三日、源頼朝石橋山舉兵の先陣に於て豪雨中、大庭景親の弟俣野五郎景久と闘ひ、長尾定景のために殺された。眞に痛恨のことである。

靜御前

源義經の妾である。其の京師に在るの目土佐房昌俊が義經を圖らうとした。靜之を悟つて小敵侮るべからずと、義經に甲冑弓矢を焚め之を討たしめた。義經が京師を去つて吉野山に匿るゝに及び従つて至り、山僧が攻めんとしたので、義經は靜に金寶を興へて別れ、雜色をして護送せしむ。雜色等途に金寶を奪ひ靜を棄て、去つた。山僧遂に靜を捕へて京師に送り尋で時政は之を鎌倉に致す。頼朝、義經の所在を問ふ。靜固く知らずと陳じ、また政子は靜の歌舞を促したが、靜、固辭して妾今日離別の悲に堪へず歌舞に意あらうやと、頼朝強ゆること再三、遂に立ち歌ふて曰く

芳野山峰の白雪ふみ分けて入りにし人の跡ぞ戀しき

しづやしづ賤の緒手巻くり返し昔を今になす由もがな

頼朝之を憚ばず、纔かに政子の言によつて釋け、衣を雁外に推して纏頭とした。やがて義經の胤を生む。頼朝安達清經に命じて之を由井が濱に棄てしむ。靜號泣、尋で京師に放還された。

虎御前

母は相模大磯の長者某の女、父は嘗て關東に謫せられた伏見大納言實基(重頼本實我物語に)であるといふ。幼より和歌・舞樂に長じた。曾我祐成の妾となつて相愛したことは人の知る所である。當時諸豪が之を召さうとしたが、虎は之を肯んぜ

す、曾我は寒士と雖も妾は貧富を以て其の志を易へやうやと。祐成兄弟富士野の仇討の前に相會し記念を交へて別る。祐成本懐を遂げて闕死するに及び、曾我の里に至つて兄弟の母滿江を訪れてこれを慰め、哀慕の極み箱根山に登り僧行實に請ふて祐成の冥福を修し、尼となつて信濃善光寺に往く。年十九。後祐成兄弟復仇の地に至り流涕して歌を詠じた。

浮世ぞと思ひそめにし墨衣 今また露の何とおくらん

露とのみ消えにし跡を來て見れば 尼花が末に秋風ぞ吹く

その後大磯に歸つて高麗山に住したといひ、其の草庵地(寺窪か)及び墓と考ふべき所がある。(一に寛元三年熊野に歿したといふ)

松 下 禪 尼

北條時頼の母にして秋田城ノ介安達景盛の女である。一日子時頼の爲に食を設けんとして室内の清掃等何くれと準備した。そして尼自ら小紙を裁し糊を以て障子を補修した。時に兄義景之を見て、かゝることは之を人をして爲さしめるがよい。又障子の破れを糺ぎ張りするよりも、全部張り替へるが勞が少いと云つた。尼は之を聞いて、我もかゝることは知つてゐるがそれは物の濫費である。補修にて事が足るであらうといひ、凡そ物に小破あれば之を修補し、濫りに棄却して新調濫用するの宜しからざるを戒めた。子時頼が克く勤儉を守り、政道に勵んだのは、實にこの母の教訓が與つて力があつたのである。

北 條 時 宗 の 室

艘船十里海を蔽ふて襲來した蒙古勢を粉碎し、金匱無缺の神州に一指をも觸れしめず、我が武士道の烈々たる愛國心を發揮し、國史上萬丈の光焰を放つもの、即ち時の執權北條時宗の膽略に負ふ所が極めて多い。時宗にはまた優しき一面があつて、貧者病者に對する賑恤の事業にも力を盡したのである。(神奈川縣郷土史讀本五五頁、僧忍性の條參照)

その室にして貞時の母なる覺山尼は鎌倉小坂の地に東慶寺を草創し、迫害を蒙る幾多同情すべき女性の爲に、執權貞時を

して勅裁を得て縁切寺法を定めしめた。寺は其の後代々尼僧が住し、第五世用堂和尚は後醍醐天皇の皇女で、當寺を松ヶ岡御所と稱した。第二十世天秀和尚は豊臣秀頼の女、徳川家康の曾孫である。寺法は明治に至つて止む。

阿 佛 尼

權大納言藤原爲家の妻で、權中納言爲相の母である。安嘉門院に仕へて四條また右衛門佐と號した。後薙髮して阿佛といひ、また北林禪尼の名を以て呼ばる。和歌及び文を能くし「十六夜日記」「夜鶴」の作がある。夫君爲家の歿後その傳ふ所の和歌所の采邑播摩國細川庄と近江國小野庄とがあつた。細川庄を長子爲氏に與へたが不孝の行ひがあつたので、之を爲相に與へた。爲氏之を返さず、依て阿佛は建治三年幕府に訴へんが爲に京を發ちてはる／＼鎌倉に來た。「十六夜日記」はその時の日記である。訴斷永く決しなかつたが、遂に阿佛の望みの如く裁決された。尼は滞留七年、弘安六年九月に歿す。その墓は鎌倉英勝寺の近くにある。(武相史蹟名勝綜覽、鎌倉月影ヶ谷、扇ヶ谷の條參照)

南 の 方

持明院藤原保藤の女である。新按察典侍として宮中に奉仕し、護良親王が鎌倉二階堂ヶ谷なる東光寺の土牢に御幽居中、ただ一人常に御側に侍つて、御身の周りのことどもを取計ひ申上げた。親王は尊氏の讒によつて建武元年十月二十二日の夜武者所の武人に捕はれたまひ、常盤井殿に幽囚せられ、次で其の年十一月十五日尊氏の手に移させられ、鎌倉なる足利直義に預けられ給ふたが、翌建武二年七月先代の亂起るに及び、直義は淵邊義博をして七月二十三日の曉近く親王を弑せしめ二十八歳の春秋に富ませらるゝ御身を以て、痛ましくも逆臣の毒刃に蕩せさせ給ふた。親王の御最後まで近侍した南の方は急ぎ敷に參つて宮の御首を捧げて涙にくれたが、この地の理致光院長老と共に葬禮し奉り、髪を落して泣く泣く京へ上り、委しく奏上したのである。

照手姫

小栗満重の妾である。満重は字は孫五郎、常陸の人である。其の先大塚平重幹の四子重宗の子重義は眞壁郡小栗を食んで小栗を稱した。重義の子重成、頼朝に仕へ子孫世々小栗郷の地頭であつた。重成四代の孫が満重である。満重は上杉禰秀に與した爲多くの領地を削られたのを怨み、應永二十九年閏十月兵を擧げて鎌倉に叛いたので、足利持氏は上杉重方をして之を討たしめたが、満重却て之を破り、翌二十年持氏自ら兵を率ゐて小栗城を攻むるに及び、満重は三河に逃れた。即ち途に相模藤澤なる横山太郎の家(一説に神奈川權現山の山賊の家)に宿をかりたが、太郎は山賊で満重を毒酒を以て殺し財を奪はんとした。酒に侍した照手は密かに満重に告げて遁れしめた。(時に遊行第十四代大空上人が満重を授けて紀伊に至らしめたといふ)照手横山等に満重を逸したるを責められ、逃れて武藏金澤に至り漁夫に扶けられて其の家に入つた。然るに其の妻は之を妬んで照手を松樹に繋ぎて煙殺せんとしたが、纒かに免れて美濃青森の里に至つて妓となつた。後満重京師に訴へて罪なきを得るに及び、照手を贖ひて之を娶り、又横山等を誅した。満重は應永三十三年三月十六日常陸に歿し、照手は藤澤山(藤澤遊行寺長照庵)に入つて尼となり長照と號し、永享十二年十月十四日に歿したといふ。

英勝院阿萬の方

徳川家康の側室である。太田道灌の孫源三郎康資の女、新六郎資宗の妹である。十三歳にして徳川氏の侍女となり、後阿萬の方と改め松姫、市姫を生む。二人育せず。水戸頼房を養ふて子となす。阿萬の方慧才がありて家康に愛せらる。家康、秀頼と和するの時、木村重成大阪の使者として二條に來る。家康誓紙に血判したが、重成は之を薄しとて取らず、家康吾年老ふて血少し、阿萬再び我が手を刺せと、阿萬は家康の指を刺す様にして己の指を刺して之を印せしめた。重成之を覺らず取て歸つた。後鎌倉扇ヶ谷なる舊太田氏館趾の地に英勝寺を草創した。寛永十九年八月二十三日逝く。則ち寺に葬つて英勝院と稱す。

松田 たつ

相模平塚の人、大久保長門守教寛の内所に奉公した女中、或る時女中老が心得過ちし事があつたのを、女の年寄大に怒り罵つて打擲に及んだ。女中老は親にも叩かれた事は無いものと獨言して部屋に歸り、文書きて女中に持たせ、その際に自害し果てた。女中たつはいたく其の主なる女中老に同情し、かの女の年寄を殺して其の仇を討つた。長門守は女中共を殘らず集めて其の行爲を批判せしめた。何れも忠義といひ、けなげと讃めた。即ち長門守はたつを年寄に取立て、これを賞した。このこと湯淺元禎の『常談紀談』にあつて、かの加賀見山お初の物語と酷似してゐる。たつの墓は平塚廣藏寺側の墓地にある。(考古集録第二項参照)

一一宮尊徳の女文字

文字は二宮尊徳を父とし、波子を母とし、文政七年七月十七日を以て生る。孔子の教の實現者としての父と、家計萬端より農耕稼穡の事に至るまで、内助の功多き母の偉大なる感化を受けて人となり、日常の出所進退は兩親の實行履修を以て悟得し、學術技藝はそれ／＼の教師に就いて學んだ。兄彌太郎は幼少より書が上手であつたが、文字は書も巧みであるが繪が非凡であるとして、兄妹共に書や畫を習はしめられた。即ち文字は書を若林欽吾及び不退堂倉田耕之進に就き、繪を大岡雲峰に學んで奇峰と號した。又裁縫や文學にも心を寄せた。父尊徳の晩年には其の仕法案や書翰を整理し書寫したが、女ゆへに直接國家の御役に立たぬのが残念であると嘆いた。嘉永五年八月富田高慶に嫁し、翌年七月七日二十九歳にて歿した。

喜遊

横濱岩龜樓の妓である。江戸皆川町の醫太田正庵の女で、本名をちゑといふと。安政の地震に家道衰へ幼にして行商とな

り父母を助けたが、次で吉原江戸町二丁目の甲子屋に賣られ、十五歳にして子の日と稱して妓となる。後横濱岩龜樓に移り喜遊(龜遊)と改めた。時に一米人喜遊を見て頼りに之を聘せんとしたが、當時攘夷の論旺んにして外人を厭ふの念甚だし。喜遊は固より之に應ぜず、主人の強ふること再三、遂に作り諾し遺書を裁して自刃した。書端に歌ふて

露をだに厭ふ大和の女郎花 降るあめりかに袖は濡さじ

この人實在か、假作か説があるが、前記樓主佐藤佐吉の孫甚太郎氏宅の過去帳二十六日の條に『俗名喜遊文久二年八月』とあり、そして佐藤氏は喜遊の朋輩が神奈川本覺寺なる彼の女の墓(今、亡)に詣でたのを見聞したことなどを語つた。(横濱近郊文化史第七章第六節参照)

平沼千代子

貴族院議員平沼亮三氏の母堂である。平沼氏は其の先、常陸鹿島の神官に出づ。明暦年間保土ヶ谷に移つて商を營み初めて九兵衛と號した。五代目九兵衛に至り天保十年舊袖ヶ浦の西邊、尾張屋新田の東に續く沮湖地の埋築を決行し、爾後六代・七代相承けて苦辛慘憺面積十餘萬坪の平沼新田を開くに至る。而して七代九兵衛は文久三年始めて平沼新田に移住した。千代子夫人は即ち其の七代九兵衛の室である。保土ヶ谷の素封家足立郎左衛門の長女で、嘉永元年三月十五日を以て生れ、年十七にして平沼家の人となつた。性婉順、勤儉内助の功が多く、しかも報國の精神の強い人であつた。日露開戦の初め獎兵義會婦人が開設せらるゝに及び、千代子は推されて其の幹部となり、連日出征兵士の送迎等に力められたが、偶々明治三十八年七月十九日炎暑を冒して、平沼驛頭に兵士を見送られた時、汽笛一聲を残して發車せんとする折、一兵士が護符を請ふたので、千代子は汽車に追隨して之を與へんとして、衣袖が車扉に挿まれて線路に墜ち痛ましくも命を殞した。

光榮の女性

褒章拜受と被表彰

大正七年二月公共の事務等勲賜の爲藍綬褒章を授けらる。 勳六等 渡邊 たま

明治二十年十二月海防費献金の爲黄綬褒章を授けらる。 松 下 くみ

大正十二年六月九日公共並に慈善事業等に壹萬圓以上の寄附により紺綬褒章を授けらる。 茂 木 マツ

昭和三年十一月社會事業に盡力の爲藍綬褒章を授けらる。 正七位 二 宮 わか

孝子・順孫

明治元年七月	生 麥 村 ツル 女	昭和七年二月十一日	横濱市保土ヶ谷區 峯岡町 湯澤 シヅエ
明治元年十月	川 崎 大 森 コヨ	昭和九年二月十一日	高座郡綾瀬村 多 田 イト
明治五年五月	津久井郡内郷村 平井 はつ	昭和十年二月十一日	高座郡綾瀬村 森 山 テイ
明治八年九月	横濱市本町 矢島 ゲン	明治七年十二月	足柄上郡谷ヶ村 武 尾 キサ
明治四十四年一月	兄源作福藏 都筑郡岡上村 高松 テル	明治八年十一月	三浦郡六會村 石 井 サキ
明治四十四年十一月	高座郡小田村 櫻井 モト	明治十二年五月	三浦郡三崎町 中 野 フユ
大正二年一月	横濱市南太田町 山上 ツネ	同	三浦郡金田村 飯 島 キヨ
大正二年一月	愛甲郡小鮎村 小島 イマ	同	橋樹郡溝口村 太 田 フジ

節 婦

武相史研究の回顧

文明開化の標語のもとに西洋文化に憧れて之れが採取に餘念なく、極端な歐化主義が流行し、邦國の歴史的・傳統的なるものは、殆んど其の眞價を認識せず、徒らにこれを放棄し破壊し蹂躪した其の反動は、明治二十年前後に於て漸次顯著となり、國粹保存の聲は年を追ふて大きくなつた。國史・古典・國語の研究は蔚然として勃興した。私の幼少時はまさにさうした時代であつた。眼にうつる越前平野の眞中、朝暾に映ゆる丸岡城の雄姿、暮靄にかすむ藤島あたりの古戰場、夜色沈々たる燈下の下読み耽つた史書、さなきだに英雄崇拜の少年心理は、時代の風潮の影響をも蒙つて國粹尊重國史愛好の念慮はかくして深められた。

明治三十八年日露戦役の眞最中、私は十七歳の年の夏、湘南の一名區たる葉山に初めて教職を奉じ、約二年の後、四十年春、櫻咲く鎌倉の師範に入つて四年間を此處に學んだ。一木一石みな歴史的色彩に彩られてゐる鎌倉の天地に起臥することゝなつた私は、課業の餘暇はこの地の谷戸々々なる草むす古英雄の夢の跡を、そこはかとなく探ね廻り、次で鎌倉の外郭へと次第に視野を擴げた。大臣山の松籟、山比ヶ濱の濤聲、さては大藏幕府跡の淋しい蛙の歌聲など、いつまでも忘れることの出来ぬ印象である。學校を出で教務の餘暇、横濱の歴史地理的研究を始めた。そして大正元年より郷土研究に關する機關を設けんとする準備をしたが、偶々翌大正二年十月、大島久滿次知事の時、神奈川縣廳舎新築落成記念事業の一として神奈川縣民政資料展覽會が開催せられ、佐藤善治郎氏及び吉川貞次氏と共に其の委員を囑せられた。此の展覽會は縣より各市町村に通牒して史料の出品を慫慂したので、縣下の各地より古器物・古文書・記録・繪圖・寫眞等極めて多數のものが集まつた。そこで三人はそれ等を分類陳列すると共に『民政資料小鑑』といふものを作つた。

この展覽會を機として前記の三人は横濱歴史地理研究會を創設し、毎月講演會を開き、また史學界の諸先學を聘して講演を請ふたりした。日本歴史地理學會から出版された『武相郷土史論』はその時の講演集である。この會の創設間もなく大正

三年十二月私は那覇天妃小學校長として琉球に渡つた。琉球が我が日本の古物博物館とでも言ひたい様に風俗・言語はもとより史學・地理學上是非一度は觀たいと思つたので喜んで就任し、公務の傍ら全島を觀察調査して『琉球大觀』『南島の自然と人』などを書いた。滞留二年數箇月にして二十八歳より六年間東都に勤學した。私が琉球に赴任して間もなく吉川氏は京都府立中學校長として横濱を去り、佐藤先生は神奈川高女の創立に忙はしく、爲に横濱歴史地理研究會は中絶の姿となつた。私は歸來後、主として遺蹟・史蹟の考古學的調査を始めたが、大正八年に及び前記の研究會を再興すべき機運に向つたので、同十一年十一月當時横濱在住の谷川(大場)磐雄氏や八幡一郎氏と圖り名稱を武相考古會と改め、爾來講演會・史蹟踏査會を開き、會誌『武相研究』を刊行し、考古學・史學殊に武相郷土史の調査研究に力めたのであつた。

武相考古會を創設した同七年の夏、中山每吉氏や木島郷氏から郷土研究會を設けようではないかといふ相談があつて、相模國分寺の遺趾海老名村で其の初回の會合が開かれ、相模出身の先輩沼田頼輔氏を會長として相武史談會を組織し、寒川・平塚・箱根・三増で講演會が開かれ、二度『相武史壇』といふ機關誌を出して中絶した。又横濱には加山道之助氏や曾我部一紅氏等が起した横濱史談會があつて、この兩氏は主として横濱關係の史料を澤山に蒐集してゐた。然るに加山氏は其の所藏の史料を大正震災火災で悉く焼いて了つたし、曾我部氏は横濱に關するものも富士山に關するものも多く藏してゐたが、氏はそれ等の史料を搬出せんとして、慘ましくも震災の犠牲となつた。また震災前から原田久太郎氏・葛城理平氏・設樂己知氏等多數の會員より成る横濱成趣會(災後横濱尚趣會と改稱)があつて、會員の中には石器時代や古墳時代の遺物を集めるもの、佛像其の他彫刻物を蒐める人、古瓦・刀劍・古錢・高札・鑑札・手形類・繪馬・古器物・古畫・古書類など何れも部門を別けて蒐集穿鑿する尙古の會がある。また横濱アルカウ會と稱する武相及び附近の山川を踏破する團體もある。共に今に活動を續けてゐる。

縣下に於ける史蹟・名勝・天然紀念物の保存事業に關係の深い團體として鎌倉同人會がある。既に創立以來二十年の星霜を経てゐる。この間八幡宮社前の段葛修築を首めとし史蹟名勝の保存修理、並木の保護、街燈の建設、道路・溝渠の掃除等

全域悉くが史蹟であり名勝と謂つべき鎌倉に於て最も適切なる施設を續行しつゝある。就中町青年團と共に各史蹟に石標を建設して探古者の利便を圖り、又大正六年には會員子爵本多正憲氏に囑し『鎌倉社寺重寶一覽』を編輯印行して會員及び希望者に頒ち、同八年十一月には精密なる鎌倉地圖を刊行し（昭和六年九月訂正上梓）大正十五年七月には相澤善三郎氏の執筆にかゝる『鎌倉社寺めぐり』を發行せるが如き、更にまた古社寺等の藏する寶物類の保管のため、寶物館建設を提唱し、遂に其の主張は實現して昭和三年四月三日を以て町立鎌倉國寶館の建造を見たるが如き、何れも其の顯著なる事業である。尙縣内には小田原有信會ありて、城下町としての小田原に於ける諸般の施設を行ひ、箱根振興會・湯河原振興會ありて箱根連山一帯の史蹟の保護、風致の維持につとめ、大山・津久井・眞鶴・川村等各地に保勝會が設けられて、それら保勝の目的に向つて仕事が進められてゐる。

大正十二年九月の大震災は縣下の各方面諸般のことに非常な蹉跌を來した。史蹟名勝並に古社寺にも可なりの被害があつた。武相考古會は深くこの變災に鑑みる所があり、災後大場氏は東京に移り、私が獨力繼續するに及び、主として武相郷土の考古學・史學・土俗學上の資料の蒐集保存に力むることとし、先づ年來の調査研究を整理して、大正十三年十月『武相の古代文化』昭和二年六月には『横濱近郊文化史』を上梓し、次で武相叢書二十卷（史料篇十卷・考古篇十卷）の刊行を企てた。公務を有し、而も赤手の業、時と質と兩つながら缺如せる身のもとより至難事ではあるが、萬難を排して續刊してゐる。末尾に附した著作刊行目録御覽を請ふ。

曩に中央では徳川頼倫侯を首め先見達識の方々は史蹟名勝天然紀念物の保存事業に深く留意せられ、明治四十四年三月十一日名勝及天然紀念物保存に關する建議案が立案せられ、後に史蹟が加はつて徳川頼倫侯・徳川達孝伯・田中芳男氏・三宅秀氏の四名の方から提唱せられ、貴族院議に上つて可決となり、次で衆議院を通過し、次第に保存事業に關する輿論が高まり、同年十二月十日を以て史蹟名勝天然紀念物保存協會が創設せられ、次で大正八年三月八日第四十一議會に保存法案が建議せられて、同年四月九日を以て史蹟名勝天然紀念物保存法の公布となり、同年六月一日に施行されて内務省に於て調査

に着手、同九年七月第一回の保存指定が行はれた。然るに大正十二年九月一日大震災により一時保存協會の活動が中止せられ、翌十三年には行政整理によつて調査會が廢止せられたが、保存協會は十四年秋冬の頃災後復活並に組織變更に關する協議會が開かれて、こゝに倍舊の勢を以て事業を繼續せらるゝこととなり、機關誌『史蹟名勝天然紀念物』も新装を凝らせる雜誌の形となつて刊行せられ、同年三月第一回の見學旅行が始められ、また調査會も文部省訓令によつて、改めて調査委員會が設けらるゝこととなり、爾後雜誌は第十一卷に達し、見學旅行は百三回を續けて今日に及び、保存事業は愈々盛況を見るに至り、國粹保存はもとより惹いて國民精神復興・國體明徴の上に至大の貢獻をなされることとなつた。私共は創業の達識先學の方々、並に故々今日まで一意専心盡瘁せられたる當事者に對し讚仰の念を禁じ得ないのである。

保存法によつて神奈川縣に於て先づ指定せられたる史蹟は相模國分寺趾（大正十年三月）で、次で箱根關趾（十一年三月）稱名寺内界附金澤氏墓及び開山審海上人以下世代塔（十一年十月）三浦按針墓（十二年三月）早川村のびらんじゆ（十三年十二月）敵御方供養塔・舊相模川橋脚（十五年十月）法華堂趾・日野俊基墓・冷泉爲相墓・忍性墓・北條重時墓・上杉憲方墓（以上昭和二年四月）源頼朝墓（二年六月）諸磯隆起海岸（三年三月）内郷寸澤嵐石器時代住居趾（五年十一月）川尻谷ヶ原住居趾群（六年七月）建長寺及び圓覺寺庭園（七年七月）明治天皇橫須賀行在所・鎌倉御野立所（八年十一月）仙石原濕原植物（九年一月）伊勢原八幡臺石器時代住居趾・江ノ島（九年十二月）若宮大路（十年六月）明治天皇妻田村行在所（十年十一月）稻村ヶ崎（同年）の二十九所が指定せられたのである。

それ等のうち相模國分寺趾に就ては其の地海老名村に出生された博古家中山每吉氏が熱心に調査研究され、その研究は擬つて矢後駒吉氏との共著『相模國分寺志』（大正十三年十二月刊）の名著となつた。大正十二年四月山田寅元氏は縣廳社寺兵事課に於て専ら史蹟係として關係事務を扱はれることとなり、災後の復舊事務に續いて熱心に保存の仕事に當られてゐたので、間もなく昵懇となつた。昭和三・四年の頃私は引續き武相に於ける史蹟・史料等の調査を進めると共に、度々長岡喜一氏等縣當局に縣として史蹟等の調査機關を設けられんことを請ふた。後に聞くに栗原清一氏も同様申出られたといふこと

であつた。やがて昭和五年二月二十日山縣治郎知事の時『縣民讀本』の編纂委員を囑せられ大野佐吉氏・藤田哲二氏等と共に之に従事し、同年十一月三日を以て發行せられた。また同五年六月一日を以て神奈川縣史蹟名勝天然紀念物調査會が設けられて、會長學務部長九鬼三郎氏、副會長社寺兵事課長青木雄司氏のもとに、私共十人は其の委員を命ぜられた。即ち鎌倉大觀・箱根大觀・三浦大觀・横濱大觀等の著ある佐藤善治郎氏、三浦大介及三浦黨等の著者北村包直氏、相模國分寺志を著した中山每吉氏、横濱・神奈川・保土ヶ谷などの史蹟と傳説等の著ある醫博栗原清一氏、箱根と熱海等を著し特に湘西の地理に詳しき堀江重次氏、荻野山中藩等の史實に堪能な吉岡正雄氏、特に三浦半島の考古學的研究に熱心なる赤星直忠氏、横濱風俗史に明るく、また錦繪等の蒐集家たる加山道之助氏並に天然紀念物に就いては斯界の至寶と謂つべき松野重太郎氏である。然るに昭和十年六月十四日北村包直氏が突如逝去せられたので、新進の磯貝正氏が調査委員を命ぜられた。

それ等の調査委員はそれ／＼從來に倍して調査研究に當つた。調査會は昭和六年七月・九月・十月に會合を重ねて、既に文部省より指定せられたもの及び縣の假指定のものを除いて、六十五の史蹟十二の名勝地と、そして十八の天然紀念物とを選び、其の各所にそれ／＼説明を記した標柱を建て、それ等史蹟名勝天然紀念物の愛護保存、並に之に關する思想の普及を圖るの實を擧ぐるこゝとなつた。また昭和八年三月調査報告第一輯を出してより毎年續刊して今十一年三月其の第四輯を發行した。昭和六年六月二十七日私共は史蹟名勝天然紀念物保存協會神奈川縣支部理事を委囑せられたが、副會長小玉道雄氏の時、協議の上翌七年二月より保存協會神奈川縣支部の名を以て主として縣下の史蹟名勝めぐりを開始し、爾後殆んど毎月一回(第三日曜日)に之れを續行して今年七月を以て五十回(本書印刷の昭和十二年九月、六十回)を重ねた。會員約二百名、毎回の出席七八十人、可成りの盛況を呈してゐる。五十回に際して會員一同は私共に鄭重なる感謝狀に添へて記念品を贈られた。もとより郷土愛・祖國愛精神の振起作用に資せんとする微衷に出づるもの、眞摯なる會員の態度を見て感激に禁えぬ。かくて調査會は歴代知事山縣治郎氏・遠藤柳作氏・横山助成氏・石田馨氏を経て現知事半井清氏、並に歴代學務部長九鬼三郎氏・田島義士氏・外山福男氏・山縣三郎氏・大久保佳吉氏・石井錦樹氏を経て現中原啓造氏及び長岡喜一氏以後青木雄

司氏・小玉道雄氏・福田熊一氏・入江巖氏を経て望月隆治氏に至る社寺兵事課長の統整の下に着々事業が進められてゐる。縣の調査會と前後して、栗原清一氏の横濱郷土史研究會、關東學院の人々によつて創められた横濱考古學會、岡榮一氏等の橋樹考古學會等が設けられたが、昭和七年七月には主として縣下教育者を中心とする神奈川縣郷土史研究會を創設して、講演會・研究會を催し、年數回『歴史と郷土』なる機關誌を刊行して今は第六年目である。尙又各地の市區郡町村史編纂に就いては大正十年十月に始められた横濱市史編纂があり小田原藩史もあるが、最近には横須賀市史・川崎市史・又保土ヶ谷區史・中郡史等の編纂が行はれつゝあり(橋樹郡誌・三浦郡誌・戸塚町誌・高座郡誌・足柄上郡誌・足柄下郡誌・愛甲郡誌等は既に編纂されてゐる)これに關聯して横濱史料調査會・川崎市郷土愛護委員會があり、又平塚には平塚郷土史研究會、小田原には足柄史談會がある。私もその幾つかに關係してゐる。曩に記した保勝會や郷土研究會は更に各地に簇生する盛觀を呈し、つい十數年或は數年前まで郷土史や考古學的遺蹟・遺物に無關心の人々もあつたが、今では縣内殆んど到る所、繩紋式土器・彌生式土器・須惠器・埴器等の名さへ耳にするに至り、郷土に關する認識を確實にし、郷關を愛する念慮の深厚となつたことは、眞に快心に禁えぬ。

かうした盛觀を呈するに至つたのは縣内に多くの斯界に關する識者・理解者・後援者があるからである。先づ本縣は先輩沼田頼輔博士を出したので、其の感化影響を受けたこと論なく、相田次郎氏もまた相模の人である、既に前記の諸會に屬する人々のほか横濱には原富太郎氏・野村洋三氏・故新堀源兵衛氏・岡田儀一氏・佐伯藤之助氏・早川茂一氏、中川直亮氏、丹羽恒雄氏、尾形順一郎氏、金澤町の關靖氏等があり、横須賀市には大塚孝子氏・勝山直吉氏・大刀川總一郎氏等、川崎市には中道等氏・石井正義氏(北多摩郡在住)森安次郎氏・安藤安氏等、平塚市には高瀬慎吾氏・天津隆也氏等、都賀郡の跡部直治氏・山田和一郎氏等、鎌倉郡の相澤善三氏・座田司氏氏・龜田輝時氏・進藤舜氏・石渡惣平氏、高座郡の伊東覺念氏、中郡の森照吉氏、澤野永太郎氏、足柄下郡の片岡永左衛門氏・福原律太郎氏・外島劉氏・澤田彌義氏・原田晴康氏・杉山宮治氏・松本尠氏、足柄上郡の長坂太郎氏・津久井郡の長谷川一郎氏・鈴木重光氏などがあつて、一々列擧に苦しむばかりであ

る。尙私の感激に禁えないことは、昭和九年十一月佐伯藤之助氏は大山善助氏・早川茂一氏・太田佐兵衛氏・岡田儀一氏・渡邊利二郎氏・渡邊文三郎氏、吉田勘兵衛氏・田邊徳五郎氏・中村房次郎氏・野方次郎氏・小室泰次氏・三宅馨氏・平沼亮三氏・茂木六兵衛氏・望月宣諦氏・松浦積氏等と共に私のために武相考古會後援會を組織せられたことである。

武相史の調査・研究のうち大正二年着手、昭和十一年まで續行の吉田新田を中心とする横濱の研究、縣下多數の石器時代遺蹟就中、津久井郡川尻村谷ヶ原・中郡伊勢原町八幡臺の各住居跡等の調査及び保存、幾多古墳・横穴就中、横濱市磯子區室ノ木古墳・中郡大野村眞土大塚山古墳・都筑郡中里村市ヶ尾横穴群・中郡旭村根坂間横穴群の調査、相模（大住・餘綾）國府跡の調査、相武古道の踏破踏査、武相武士の城跡・館跡の調査、土肥相山に於ける源頼朝の隠潜地探査、太田道灌關係史蹟、史料の探査、高座郡有馬村馳庵半井瑞壽館跡の調査等の如き快心のものも頗る多い。

また昭和四年九月中旬東京三越にて神奈川縣文化展覽會の開催に際し、八日には中央放送局にて講演、同十四日には東伏見宮大妃殿下に御説明申上ぐるの光榮を得、同九年九月横濱野澤屋に於ける神奈川縣文化展覽會等多くの展覽會に參畫し、また文部省・神奈川縣よりの委嘱による成人教育講座・勤務者輔導學級講師・青年學校視學委員としての出講、巡視其の他幾多の機會に於て、協會の目的とする所を普及徹底せしむる上に微力ながら奉仕することを得るは、眞に嬉しき限りで神州に生を享けたるせめてもの報謝である。然るに一昨日（十一月十日）協會創立二十五周年式典に際して、中山毎吉氏、故北村包直氏、山田寅元氏、並に鎌倉同人會と共に會長平生文部大臣より表彰の榮譽を得しめられ、感懐極めて深きものがある。偶々矢吹活禪氏より感想なり回顧なりを記述せんことを懇懇せられたので、大方に對する感謝の意を表せんが爲徹宵本稿を作る。一夜明けて官報を見れば昨日（昭和十一年十一月十一日）勅令第三百九十七號を以て、史蹟名勝天然紀念物調査會官制が公布せられ、即日より施行せらるることとなつた。本事業の前途愈々光輝を放つ。謹んで邦家の爲に慶祝し、この稿を結ぶ。

（昭和十二年一月一日發行、『史蹟名勝天然紀念物』所載、同年八月補訂）

史蹟名勝めぐり一覽

史蹟名勝天然紀念物保存協會神奈川縣支部
 神奈川縣史蹟名勝天然紀念物調査會
 （石野英著『武相史』蹟名勝綜覽）參照

回	年月日	方面	史蹟・名勝・社寺	摘要
一	昭和七年二月十四日	横濱西南部（弘明寺町、堀内町）	弘明寺、寶生寺、杉田城跡、小道地藏堂、眞鶴港（伊豆山（舟行）伊豆山神社、來宮神社、湯前神社、晴瀨館、舊熱海御用邸）	杉田は降雨の爲中止
二	三月二十日	湯ヶ原、眞鶴、伊豆山、熱海	雲松院、折本石器時代貝塚（住居跡）	文部省内、史蹟名勝天然紀念物保存協會本部と合同。
三	四月十七日	横濱西北部（小机町）	杉田町青砥山（傳藤綱屋敷）稱名寺、金澤文庫、昭和塾、龍華寺大塚（經塚）瀬戸神社、日蓮聖人船中間答蹟、九覽亭（八景展望）上行寺（吉田兼好庵跡）	
四	五月廿二日	金澤、六浦莊	水堂觀音、國分尼寺跡、國分僧寺跡、藥師堂跡、大塚古墳、大化古制龜田、有鹿神社、海老名氏館跡、海老名中守持季墓	
五	六月十九日	海老名	小野神社、石器時代遺蹟、玉川村小野横穴、龍鳳寺古墳、高部上流溪谷、大釜辨天、實時原古戰場、七澤鑛泉、玉川杉定政精屋館跡、洞昌院、太田道灌墓	
六	七月十七日	中・愛甲兩郡境	圓覺寺、東慶寺（舊松ヶ岡御所）淨智寺、明月院、山内上杉氏五坊跡、鶴岡八幡宮、白旗宮、鎌倉國寶寺、巨福呂坂、二十	
七	九月廿五日	鎌倉西北部	法勝寺（厨子、圓師）神武寺、久明親王廟、沼濱義朝・義平館跡、忠大（ジュリ）墓、觀瀆風義遺孤碑、富士塚（供養塚）新宿横穴	逗子には上記の他小坪、鳴岩殿觀音、燈指山、新嘗の宮等がある。
八	十月三十日	逗子	阿夫利神社、茶湯寺、扇平堰堤、權田直助墓	
九	十一月二十日	大田	吉田勘兵衛氏邸（舊吉田新田埋立開闢關係史料展覧會）	吉田家所藏史料展覧會後、園内伏見屋にて座談會。
一〇	十二月十八日	横濱中央部（舊吉田新田）	問津所跡、裁許橋、飢渴島、采女塚（和田塚）甘繩神明社、安達盛長館跡、築屋時忠館跡、高德院（長谷大佛）長谷寺、光則寺、歌玄院、鎌倉權五郎社、極樂寺、月影谷阿佛尼舊蹟、大館宗氏主從十一人墓、稻村ヶ崎	一月二十二日實施の筈であつたが降雪の爲延期。
一一	昭和八年二月五日	鎌倉西南部		

一二	二月十九日	横濱南部 (本牧)	本牧三溪園(天瑞院)幕末戊辰跡、八聖殿(當時建築中)多聞院、御影堂、吾妻神社、本牧神社 平間寺(川崎大師)池上幸徳氏邸(史料展観)森五郎作氏邸(史料展観)宗三寺公會堂、稲毛神社、妙遠寺、平間鏡子邸(大工喜右衛門宅、玉川小學校(水野定吉氏藏赤穂義士關係史料展観)稱名寺、輕部五兵衛宅跡 大倉精神文化研究所、網野神社、師岡具塚、樽の隆起地帯(なががき化石)綱島神明山 松田、藤原範茂墓、最乗寺、小田原城跡、御感の藤、報徳二宮神社 白根神社(白根不動)鶴ヶ峰古戰場、齋藤可一氏所藏品、龍塚薬王寺、西谷浄水場	文部省内、本都と合同、参加者二百五十餘名
一三	三月廿六日	川崎		
一四	四月廿三日	横濱西北部 (綱島及び附近)		
一五	五月廿一日	足柄・小田原		
一六	六月十八日	鶴ヶ峰		
一七	七月廿三日	江島、片瀬、腰越	江島神社、岩屋、杉山檢校墓、常立寺、龍口寺、満福寺 衣笠城跡、大善寺、満昌寺(三浦大介義明墓)清雲寺(三浦爲繼墓)腹切松、駒止石、薬王寺跡、三浦義澄墓、深谷三浦爲通三浦義繼墓、三浦爲九十三人墓 八幡臺石器時代住居跡群、比々多古墳群、比々多神社、永井健之輔氏所藏品、相模(大住)國府跡推定地、箕輪驛跡 寺所臺の水、保土ヶ谷元本陣(輕部三郎氏邸)外川神社、樹源寺、大蓮寺、神明社、橋樹神社 壽福寺(政子、實朝墓)英勝寺、扇谷上杉氏邸跡、淨光明寺、冷泉爲相墓)阿佛尼墓、相馬師常墓、海藏寺、藤原俊基墓、葛原岡神社、錢洗井戸、合樋刀稻荷社	豫定中圓通寺跡は時間の關係により他日に譲る。 昭和九年二月十八日文部省内保存協会の史蹟見學は同コトを實施。
一八	八月廿七日	横須賀市南部 (三浦半島北部)		
一九	九月十七日	伊勢原、比々多村		
二〇	十月廿九日	横濱西部 (保土ヶ谷)		
二一	十一月廿六日	鎌倉郡西部		
二二	十二月十七日	横濱東北部 (神奈川)		
二三	昭和九年一月廿一日	三浦半島北部 (走水、浦賀)		
二四	二月廿五日	平塚、大磯		
二五	三月廿一日	鎌倉(建武中興關係史蹟)		

二六	四月廿二日	茅ヶ崎、小出、寒川	十間坂、明治天皇御小休所(重田景次氏邸)舊相模川橋脚、鶴嶺八幡宮、淨見寺(大同忠相墓)梶原氏館跡、寒川秋葉古墳、寒川神社、倉見樓堤	散會に近く希望者を募り鎌倉山長尾欣彌氏所藏品展観
二七	五月二十日	葉山	鐘掛山(軍見山)森戸明神社、御用邸、長者ヶ崎、大崩古戰場 村岡城跡、玉網城跡、龍寶寺、農事試験場、常樂寺	
二八	六月十七日	大船		
二九	七月廿九日	矢口、橋	新田神社(東京府)矢口渡、能満寺、影向寺、橋神社、泉澤寺 生麥事件舊蹟、風早石器時代遺蹟、番神臺石器時代遺蹟、番神堂、池谷氏重集品展観、總持寺、東福寺 葛横濱驛(榎木町驛)萬洲乾辨天社跡、神奈川文化展覧會(野澤屋)觀覽、吉田橋關門、馬車道、港崎町、横濱町會所跡、横濱應接所跡、山手外人墓地、港崎町、横濱町會所跡、横濱大庭神社、大庭城跡、養命寺、羽馬餅餘祭跡、白旗神社、傳義經首塚、傳義經首洗井戸、清淨光寺	散會後希望者は上司家文書を觀る。 午後六時より野澤屋に於ける神奈川縣文化講演會。
三〇	八月廿六日	横濱北部 (生麥、鶴見)		
三一	九月廿三日	横濱中央部		
三二	十月廿一日	藤澤		
三三	十一月廿五日	都筑中部	長津田、皇太子殿下御野立所、大石神社(矢倉澤往還、途上富士塚其の他)市ヶ尾禪當寺、横穴群、川和八幡神社境内の大杉、川和松林園、中山家の菊	平石家所藏史料展観後神奈川土橋壽司屋にて座談會
三四	十二月十六日	横濱北部 (三浦)	深渡具塚、豊顯寺、多米氏の墓、高野嶺、平石家所藏史料展観	
三五	昭和十年一月廿七日	鎌倉東南部	高山重保墓、一ノ鳥居、由比ヶ濱、和賀江島、矢ノ根井、住吉城跡、北條經時、記主禪師以下世代墓、光明寺、長勝寺、鏡子ノ井、日蓮の水、安國論寺、安養院、別願寺、本覺寺、妙本寺、底倉、新田義則遺蹟、大開風呂、二ノ平塚、底倉塚、千條瀧、鷹巢城跡、湯坂峠、湯本見付松、白石山地蔵(箱根山中、鎌倉古道の一部)早雲寺 海老名、國分尼寺跡、水堂、湧河寺、座間星谷寺、鈴鹿明神社、眞覺寺、東慶寺(松ヶ岡尼寺)葛原岡及び藤原俊基墓、錢洗井戸、佐介ヶ谷及び佐介稻荷、山井ヶ濱	箱根底倉葛屋にて一泊。
三六	二月十四日	箱根東南部		
三七	三月廿四日	座間、麻溝		
三八	四月廿一日	鎌倉西北部		
三九	五月廿六日	曾我・上府中	宗我神社、御靈社、阿彌陀寺、矢ノ根井、不動山(今大山)曾我氏館跡、城前寺、崇泉寺跡、御靈社跡、曾我祐信塔、澄禪窟満江屋敷跡、山伏塚、千代觀音舊地	
四〇	六月廿三日	金田、依知、厚木	金田妙純寺、建徳寺、本間氏累代の墓、金田神社、上依知妙傳寺、厚木銀紙飛行場、厚木六勝、船喜田神社	

四一	七月廿八日	保土ヶ谷、永野	保土ヶ谷原田氏邸、若尾の茅葺屋根、權太坂、投込場、血櫻舊跡、明治天皇御小休蹟、若林喜助氏邸、境木地蔵堂、舊代官萩原邸、一甲塚白旗神社、東福寺、永谷天神社、貞昌院	拙著考古集録第四参照。
四二	八月十日—十日	足柄崎より多摩河畔まで	相武古道(延喜式に據る驛路)踏破	十月二十日管德八十年祭當日文部省内保存協會史蹟見學同コース實施。
四三	九月二十五日	二宮尊徳遺蹟	二宮尊徳舊住家、櫻井村東栢山尊徳誕生地、伯父萬兵衛家、二宮兵三郎家、油菜裁植地、拾遺裁植地、善榮寺、二宮總本家、醫師道仙宅、酒匂川坂口堤、曾比報徳堀、小田原町報徳二宮神社	十月廿七日、十一月十七日兩日とも雨天の爲延期。
四四	十月二十日	鎌倉東北部	宇都宮辻藤府邸、若宮大路墓府邸、高山重忠邸、東御門邸、西御門邸、源頼朝墓、永福寺、永安寺、瑞泉寺(足利基氏、花柄天神社鎌倉宮、ユルカリ樹、永安寺、瑞泉寺(足利基氏、同母、満兼持氏墓、ユルカリ樹、大懸ヶ谷、日蓮辻説法所、本寺、淨妙寺(足利貞氏墓)、東勝寺、日蓮辻説法所、在柄關邸、南御門、寶寺、東勝寺、石知(古墳石棚殘石)波多野氏邸、源實朝首塚、金山寺、秦野町會屋神社、秦野水道貯水池、唐子神社舊地、古墳、南秦野村震生湖	二月は衆議院議員選挙の爲中止。
四五	昭和十一年一月廿六日	秦野	圓海山護念寺、杉田妙法寺、東漸寺	五月は六月十日縣會議員選挙につき中止。
四六	三月廿九日	横濱南部	平塚、花水川畔、旭村藥王寺、寶珠院、根坂間横穴群、出繩古墳、出繩古墳、粟津神社、萬田横穴群、萬田貝塚、山下長者屋敷、灰塚、千巻敷、大磯、善人善長衛碑	此の日高部屋、成瀬兩村では太田道灌四百五十年祭を舉行。名勝めぐり五十回を重ねたるの故を以て會員一同により感謝式が五霊社前に擧げられ感銘深し。
四七	四月廿六日	横須賀	三浦按針夫妻墓、明治天皇行在所蹟、三笠館、西來寺(故北村包直委員墓)	
四八	六月廿八日	高部屋、成瀬	伊勢原、成瀬村大慈寺(太田道灌首塚)、高部屋神社、七五三引太田五霊社、精屋太田道灌墓、洞昌院、上杉定正館、心敬僧都庵	
四九	七月十九日	有馬	戸塚、有馬村壽園寺、同寺墓地、眞光寺、本郷神社、佐藤家(中山虎男墓)本覺寺、椿地蔵、瓢塚(前方後圓古墳)豊受大神(龜庵)半井瑞壽館、なんぢやもんぢやもん樹	
五〇	九月二十日	石橋山、石垣山	早川、片浦海岸、寶壽寺、早川眞福寺觀音、石垣山岩跡、びらんじゆ	
五一	十月十八日	石橋山、石垣山		

五二	十一月廿九日	金澤連丘、鎌倉	金澤文庫跡—金澤連丘(能見堂跡、筆捨の松、山海關)—鎌倉天國—鎌倉北部連丘、覺園寺、鎌倉東北部(第四十五回参照)	昭和十二丁丑の新春牛に因みある天神の初詣をなす
五三	昭和十二年一月二十四日	横濱南部(磯子)	市電天神橋、根岸堀割川、磯子小学校にて表食後講演(室ノ木古墳跡、金珠院、眞照寺(磯子小学校にて表食後講演)室ノ木古墳跡、金珠院、眞照寺)	文部省内保存協會本部見學旅行(第百五回)ご合同。
五四	二月廿一日	三浦半島	浦賀、三崎海南神社、櫻ノ御所跡(本瑞寺)椿ノ御所跡(大椿寺)城ヶ島遠望(三崎小学校にて歴史上より觀たる三浦半島演新小生、三浦半島の石器時代、古墳時代の遺蹟遺物赤星君)磯新井城跡—先史遺蹟、陸起海岸、臨海實踐所、水族館、本丸、二丸、三浦義同、義意墓、引橋)西浦、大浦町、葉山町、逗子町	六月二十日川崎市體育會山岳部主催史蹟巡りハイキングは東海道沿道史蹟及び湘西源頼朝舉兵戦蹟巡覽。
五五	四月三日	湯河原	湯河原ホテル、土肥大杉跡、鶴ノ宮の谷、土肥城跡、城願寺	五月二十三日川崎市體育協會山岳部主催川崎市北部史蹟ハイキングは川崎より上行記遺史蹟及び中原に亘りて行ふ。
五六	五月十六日	日吉、加瀬	日吉臺石器時代住居跡群、同古墳群、觀音松、觀音寺、加瀬山白山古墳、同第六天古墳、加瀬臺古墳群、夢見ヶ崎	七月七日以來勃發の日支事變に際し炎熱下で奮闘する皇軍將士の武運長久を祈願す。
五七	六月十三日	津久井溪	筑井古城跡、津久井溪、川尻村谷ヶ原石器時代住居跡群、相模川鮎漁	元軍滅策の源地鎌倉武士の烈々たる氣魄を追慕す。新田義貞戦死を公を偲ぶ。
五八	七月二十一日	鎌倉及び片瀬の各一部	國幣中社鶴岡八幡宮に皇軍の武運長久を祈願す。筋違橋、北條執權邸跡、寶戒寺、葛西ヶ谷(東勝寺跡、北條氏腹切矢倉、高時墓)妙隆寺、日蓮辻説法所、夷堂橋、比企ヶ谷(妙本寺、蛇苦止社、琴柳松)本覺寺、大巧寺、比企ヶ谷橋、島山重保墓、七里ヶ原、比企ヶ谷、稲瀬川、稲村ヶ崎、長谷より電車にて檢校杉山和一建立の江島道標	川崎大師に武運長久を祈願し、また戦死將士の冥福を修す。
五九	九月十九日	川崎東部	川崎關門番所跡、八町暖芭蕉句碑、渡田新田神社、成就院、石觀音、大師河原砂糖製造所跡(池上氏邸)鹽製造所跡、徳本行者念佛碑、平間寺(川崎大師)六郷川、穴守稻荷	
六〇	九月十九日	川崎東部		

(爾後益々繼續、祖國愛、郷土愛精神作興の爲、心身の健康増進のため、大方の参加を冀望する。)

石野瑛著作・校訂・編纂圖書目録

(特に記さざるものは武相考古會刊行)

書名	刊行年月	體裁	頁數等	分譲	價格
横濱最新西洋史年表	大正元年十二月	四六判		絶	
梅の杉田	大正二年三月	菊判	折本	同	(東京・京橋・良明堂刊)
挿畫日本歴史年代圖	大正三年二月	四六判		同	
琉球	大正三年三月	同		同	
琉球大觀	大正三年十二月	同		同	
南島の自然と人	大正四年六月	同		同	
南島を懐ひて	大正五年四月	同		同	
少年少女世界史	大正六年五月	同		同	
横濱演習要覽	大正七年八月	同		同	
横濱演習要覽	大正七年九月	菊半裁判		同	
横濱演習要覽	大正八年五月	菊半裁判		同	
大震災大火の横濱	大正十二年四月	菊判		同	
復興の横濱	大正十二年十月	四六判		同	
復興の横濱	大正十二年十二月	同		同	
日本民族史概論	大正十三年四月	菊判		同	
西洋史講義	大正十三年四月	同		同	

武相表書
史料第一編書
史料第二編書

武相表書
史料第三編書

武相の古代文化	大正十三年十月	菊一二頁	圖版五四個	東京・早稲田・久野書店刊	二圓五〇
武相考	大正十五年四月	四六判		同	
横濱近郊文化史	昭和二年六月	菊七二頁	圖版一一一個		六圓〇〇
舊吉田新田の今昔	昭和三年二月	同		(吉田家)	
吉田新田古圖文書	昭和三年十一月	同		(吉田家)	
考古要覽	昭和三年六月	一三六頁	圖版二四個		、八〇
亞墨理駕船渡來日記	昭和四年七月	一四〇頁	圖版一二個		、一五〇
金川砂子附神奈川史要	昭和五年四月	二五〇頁	内繪圖六〇個	(縣・農・銀)	、二〇〇
輝かしき神奈川縣の歴史	昭和五年五月	四六判			
相模のおたつ傳と平塚附近の史的概観	昭和五年七月	二二頁	圖版二個		、二〇
神奈川郷土史	昭和五年九月	四六判		(岩科氏刊)	
安政から昭和まで	昭和六年三月	二二四頁	口繪一二枚 圖版四一個	女喜十郎の遺稿編纂	、一〇〇
相模大山縁起及文書	昭和六年三月	二〇〇頁	圖版三〇個		、一八〇
横濱郷土史	昭和六年九月	四六判		(岩科氏刊)	
神奈川縣郷土史要	昭和六年十一月	菊判		絶	
相模國津久井郡川尻村谷ヶ原石器時代住居跡調査報告	昭和六年十一月	同			
小机城址と雲松院及び泉谷寺	昭和七年四月	四六判		(小机町内會)	、一五〇
神奈川縣郷土史の歌	昭和七年五月	四六倍判		樂譜	、一〇

武相叢書
史料第四編

小田原及箱根史料	鎌倉及び附近の史蹟と古社寺	昭和七年七月	二八〇頁	圖版七一個	二四二〇
本牧と三溪園	相模大山學派の碩學權田直助	昭和八年八月	四六判		一、一五
神奈川縣郷土史讀本	武藏國都筑郡中里村市ヶ尾横穴群調査記	昭和八年二月	菊一〇四頁	圖表、地圖 挿圖四八個	、一五
保土ヶ谷史談	相模國中郡旭村根坂間横穴群調査記	昭和八年五月	菊四六判		、一五
相模國中郡伊勢原町八幡臺 石器時代住居群調査記	相模國中郡伊勢原町八幡臺 石器時代住居群調査記	昭和八年七月	菊同		、一五
相模(大住・餘綾)國府址考	相模(大住・餘綾)國府址考	昭和八年八月	菊同		、一五
横濱文書及石川家史稿	神奈川縣下に於ける 建武中興關係の神社と史蹟	昭和八年十二月	菊二〇二頁	圖版四〇個	、一、八〇
建武中興六百年記念歌	建武中興六百年記念歌	昭和九年三月	菊一〇二頁	圖版七個	、五〇
日本考古學研究上の諸問題	日本考古學研究上の諸問題	昭和九年四月	菊同		、二〇
輝く神奈川縣史	輝く神奈川縣史	昭和九年九月	菊五〇頁	圖版四三個	、二〇
足利彦根横濱に於ける平石家	足利彦根横濱に於ける平石家	昭和九年十二月	菊六五頁	圖版一〇個	(平石家)
考古集錄第一	考古集錄第一	昭和九年十二月	菊二一三頁	圖版七二個	一、八〇

武相叢書
史料第五編

武相叢書
考古第二編

考古集錄第二	横濱市磯子區室ノ木古墳調査記	昭和十年六月	菊二〇六頁	圖版六〇個	一、八〇
報徳教の要諦と二宮先生の遺蹟	報徳教の要諦と二宮先生の遺蹟	昭和十年八月	菊同		、三〇
河村城址の踏査と其の考察	河村城址の踏査と其の考察	昭和十年十月	菊同		、三〇
河村城址の踏査と其の考察	河村城址の踏査と其の考察	昭和十一年二月	菊同		、三〇
國史上より觀たる足柄・箱根	國史上より觀たる足柄・箱根	昭和十一年三月	菊同		、三〇
砂丘を利用したる古墳例	砂丘を利用したる古墳例	昭和十一年四月	菊同		、三〇
相模國中郡大野村眞土大塚山古墳調査記	相模國中郡大野村眞土大塚山古墳調査記	昭和十一年四月	菊同		、三〇
湘西に於ける源頼朝舉兵戦蹟	湘西に於ける源頼朝舉兵戦蹟	昭和十一年九月	菊同		、三〇
横濱舊吉田新田の研究	横濱舊吉田新田の研究	昭和十一年十月	菊二四八頁	木版五度刷(二頁) 大一枚、圖版二 頁大地圖、他六頁	一、八〇
鹽庵半井瑞壽と其の家系	鹽庵半井瑞壽と其の家系	昭和十一年十二月	菊四六判		、二〇〇
神奈川縣郷土史讀本	神奈川縣郷土史讀本	昭和十二年四月	菊一六頁	地圖年代圖 圖版六四個	、二〇〇
輝く神奈川縣史	輝く神奈川縣史	昭和十二年四月	菊四二頁	地圖年代圖 圖版三二個	、二〇〇
多摩川デルタに於ける文化の進展	多摩川デルタに於ける文化の進展	昭和十二年五月	菊四六判		、二〇〇
相模土肥相山に於ける源頼朝の隠居地	相模土肥相山に於ける源頼朝の隠居地	昭和十二年六月	菊同		、四〇
道灌太田持資に關する史蹟史料調査記	道灌太田持資に關する史蹟史料調査記	昭和十二年七月	菊同		、四〇
總檢校杉山和一建立の江ノ島道標	總檢校杉山和一建立の江ノ島道標	昭和十二年九月	菊同		、二〇
東亞の 日支事變の原因と戦況	東亞の 日支事變の原因と戦況	昭和十二年九月	菊同		、二〇

武相叢書
史料第六編

武相叢書
考古第三編

武相叢書
考古第二編

神奈川縣郷土史上の女性	昭和十二年九月	菊	刊	、二〇
武相史蹟名勝綜覽	昭和十二年十月	三六	刊	上、下各一、〇〇
考古集録第四				
武相傳説土俗集				
武相美術工藝集				
武相歌謡曲譜集				
日本職業史概論				
日本地方郷土史綱要				

武相叢書
考古第四編

日本地方郷土史綱要

皇紀二千六百年を迎へんとするにあたり、神國に生を享け、盛世にあへる感激を永く記念し、報謝の微衷を表はすため各府縣道廳の郷土史的考察を通して皇國史の全貌を記述し、祖國愛・郷土愛精神の強調に資せんとするもの。大方の御後援を冀ふ。

武相叢書

史料篇十卷・考古篇十卷

史料篇	第一編	亞墨理駕船渡來日記	嘉永七年(安政元年)亞米利加船渡來當時の横濱村及び附近の有様及び外人應接の顛末を敘したる二種の記録を収む。	昭和四年七月	一圓五〇
	第二編	金川砂子附神奈川史要	文政年間神奈川の隠れたる雅人煙管亭喜莊によつてものされたる名所圖繪の原稿を得て初めて世に出せり。	昭和五年四月	二、二〇
	第三編	相模大山縁起及文書	關東信仰界の一大中心、相模國御嶽たる大山に存する文書記録及び縁起繪巻を記載せり。	昭和六年三月	一、八〇
	第四編	小田原及箱根史料	湘西に存する北條氏の虎朱印文書を初め、同地方の史料を記載し片岡永左衛門氏の譯鈴餘香を附す。	昭和七年七月	二、二〇
	第五編	横濱文書及石川家史稿	横濱に現存する古文書を集載し最舊家たる石川家史を附す。横濱史研究の好資料なり。	昭和八年十二月	一、八〇
	第六編	横濱舊吉田新田の研究	横濱市の核心吉田新田埋立開墾に關する吉田家所藏史料の全部を收め併せて全市に亘る新たな歴史地理學的考察を試みたるもの。	昭和十一年十月	一、八〇
	第七編	鎌倉及金澤古圖文書	鎌倉古社寺及び金澤文庫及び江ノ島に於ける記録文書古圖繪卷等を集む。	(以下續刊)	
	第八編	南武史料雜集	南武三部の各地に存する記録文書其他史料を記載す		
	第九編	相模史料雜集	相模八郡の各地に存する記録文書其他史料を集録す		
	第十編	武相金石文集	神佛像、鐘、鐃、鐃口其他祭器、佛具の銘、鏡蓋及び器具、刀劍其他武器等の銘、瓦碑の文字、墓碑の文等を集む。		

考古篇

昭和九年第一編刊行
以後毎年二巻づゝ續刊

第一編	考古集録第一	論考説話及武相踏査雜記	昭和九年十二月	一、八〇
第二編	考古集録第二	相模中部遺蹟及史蹟調査記	昭和十年六月	一、八〇
第三編	考古集録第三	相模中部遺蹟調査記及國府趾研究	昭和十一年一月	一、八〇
第四編	考古集録第四	相模西部北部踏査及相武古道研究	以下續刊 (昭和十二年十月)	
第五編	考古集録第五	相模東部・南部遺蹟及史蹟調査記		
第六編	考古集録第六	鎌倉及附近調査並ニ鎌倉古道研究		
第七編	考古集録第七	武藏南部遺蹟史蹟調査記		
第八編	考古集録第八	武藏南部遺蹟史蹟調査記		
第九編	考古集録第九	論考説話及武相踏査雜記		
第十編	考古集録第十	論考説話及考古行脚雜記	附索引	

共同編纂並に執筆 (主なる一部)

縣民讀本	昭和五年十一月	神奈川縣の委囑により一部執筆
日本地理風俗大系 (關東編)	昭和五年十二月	新光社の委囑により一部執筆
神奈川郷土史	昭和五年九月	岩科清次氏の依頼により栗原清一氏と共に執筆
横濱郷土史	昭和六年九月	東京朝日新聞社の依頼により執筆『朝日グラフ』に掲出
全國郷土自慢リレー 新文化の搖籃神奈川縣	昭和七年五月	建武中興六百年記念會神奈川縣支部の委囑により一部執筆
建武之中興	昭和九年三月	文部省内、社會教育會の委囑により神奈川縣の部執筆
日本郷土物語	昭和九年十月	吉田家の依頼により執筆
横濱吉田新田圖繪	昭和十年八月	神奈川縣教育會の委囑により吉田太郎氏と共に編纂
青年學校國史教科書	昭和十二年	

雜誌・新聞執筆目録は省略

376
188

近刊

文部省青年學校視學委員
神奈川県史蹟名勝天然紀念物調査委員

文學士 石野 瑛著

武相史蹟名勝綜覽

(定價 一圓)
昭和十二年十月刊行

主として神奈川県下の先史・原史遺蹟・各時代史蹟・神社・佛寺・名勝・天然紀念物等を網羅して簡明なる解説を施せるもの。
國史・郷土史研究、歴史科教授、史蹟探訪等に御利用を冀ふ。

昭和十二年九月十日印刷
昭和十二年九月十五日發行

代購處

發行所 武相考古會
石野 瑛
江森 八十吉
横濱市神奈川區岡野町一三二
電話 神奈川高 〇六二五番
振替口座東京七五〇二七番

卷頭所掲の如く、一には學界のため、一には祖國愛・郷土愛精神の振起策勵に資せんがため、三十年來の調査研究の結果を續刊してゐます。就中『日本地方郷土史綱要』並に『武相叢書』二十卷は著者畢生の事業の一であります。
大方諸賢は著者の微志を御諒察下さいまして御高覽を得たく、殊に神奈川県下の學校・圖書館等には、精々目錄中の多種を御備付下さいまして、郷土教育上に御利用願ひたう存じます。漸次品切となりますから、なるべく早く御申込を願ひます。

武相考古會

横濱市神奈川區岡野町一三二番地
電話 神奈川高 〇六二五番
振替口座東京七五〇二七番

終



昭和十二年九月十五日

¥20

武相考古會

横浜市神奈川區岡野町一三一
電話神奈川區〇六二五番